旅人が見たもの

あひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
旅人が見たもの

【Ｎコード】
Ｎ３７７１Ｗ

【作者名】
あひる

【あらすじ】
旅好きの旅馬鹿が、様々な風景や出会いと別れを繰り返し、まったりのんびり旅をしています。ヤマなしオチなし。ゆるっとファンタジーがさりげなく入りますが、あまり強くありません。１つのお話がとても短いので、お手隙にドゾ。短い中にも喜びや切なさを篭めていけたらいいなぁと思います。／短編・掌編の寄せ集めなので、あくまで短編集と名乗らせていただきます、ええ（笑／時系列バラバラです。一応、章はありますが、どちらかと言うとシリーズ的な。／どこから読んでいただいても構いませんし、支障ありません。／

レビューでプレッシャーかけられて戦々恐々ですが、ストックがなくなるまでマイペースで行きます。主に旅人が。

旅ノ意

空をゆく雲を見つめると、傍らに人の気配を感じた。
一目で旅人と分かる、旅慣れた服装。そよ風を纏ったような儚さが、その旅人にはあった。
「いつか、俺に言ってくれたよな……」
古い日記をめくるように、思い出がひとつ、またひとつと溢れてくる。
旅人が口を開く。
「果てしない旅を続けるのは、遥かな空の彼方を、雲途絶える所を、夢が降り立つこの大地を、探し続ける事なんだ」
見晴らしのいい丘の上。青く澄み渡る空を眺めるその眼差しは、宝物を探す少年のように、輝いている。
「どんな意味があるのか、俺には分からない」
青年は膝を抱え、顔を埋めた。
そんな青年を、旅人は優しさと愛しさが入り交じった、柔らかい微笑みで見つめる。
「だろうね。例えば煌めく星の子達を、輝く月の光を、掴むような話だから」
「馬鹿だろ」
「分かっている。いくら夢の翼を羽ばたかせた所で、星の子も月の光も、掴める物じゃない事は」
それでも、と旅人は一歩、歩き始める。
「旅する意味などないのだよ。私はただ、旅をしたいだけ。それを分かってもらいたかった」
階段を駆け上がるように、旅人は空を飛ぶ鳥を追い越してゆく。
旅ができる喜びに身を任せて、風と共に幻は消えた。
「死んだら旅を続けられないだろ、馬鹿」
彼は呟く。

どこで果てたとも知らない友に、想いを馳せて。

荒野の立て札

寂しい山道を、独り歩く。
荒れて渇いた地面に、枯れかけた草が所々に横たわる。
遮る物のない道は、旅人に陽射しを容赦なく浴びせる。
マントや帽子で軽減しているものの、厳しいことに変わりはない。
疲れたら少し立ち止まり、携えている水筒の水で喉を潤す。
これがもし緑豊富な森ならば、果実や涌き水がその役目を担うところである。
こうも渇いた土地では、野性の生き物を狩り、腹を満たすことさえ困難だ。
そんな過酷な状況にありながらも、その旅人はどこか幸せそうな笑みを浮かびながら、黙々と歩いていた。
道端に、砂埃で薄汚れた小さな立て札がある。
片膝を着き、手で表面を払うが、長年の汚れはそう簡単には落ちない。
どう頑張っても、書かれている文字は読めないままだ。
旅人は、名残惜しそうに立て札から離れる。
機能しない立て札。
昔は旅の道としてよく利用されていた証。
それが直されていないのは、もう長らく使われていないと言うことだ。
少しの寂寥感と懐かしさを立て札の傍に置いて、旅人は旅を再開する。
その旅路は、過去へと続くのかも知れない。

最初の旅

最初の旅は、まだ幼い頃。隣村へのお使い。
隣村と言っても、徒歩で数日かかる。
馬車やその他交通手段を用いるほど、裕福ではなかった。
だから、森や山などの危険な区域には立ち入っていない。
見渡す限りの草原に、意味もなく胸が高鳴ったものだ。
知らない世界を見ていると言う高揚の前には、恐怖感など生まれる筈もない。
小さな地図を持ってはいたが、まだ地図の読み方すら知らなかった。
当然、迷った。
迷いに迷って出た先は、広大な海。
故郷の近くにも海はある。
押し寄せる白波や、時折吹き付ける潮風、宝石のように輝く水面は、故郷の海と変わらない。
きっと、海は世界のどこも同じだろうと、その時はそう思った。
勿論、実際にはそんなことはなかったのだけれど。

花びらと蝶

どこからかやって来た花びらが、風に躍る。
地面を見遣れば、柔らかそうに転がっている。
周囲には特に目立つ花などない。
そもそもこの花の主は、大樹である。
荒野にぽつんと立つ孤独な性質は持ち合わせておらず、仲間のたくさんいる山で群れる、寂しがり屋だ。
ふと、散りゆく花びらの中に、不思議なものを見る。
花びらと同じ大きさのそれは、小指の爪ほどの羽に淡い桃色を纏わせ、花びらと見紛う可憐さを伴っている。
蝶だ。
この花をとてもよく好み、本来なら山で生活する種類である。
恐らくは花びらと共に、風に流されて来たのだろう。
しかし蝶は、その一頭だけではなかった。
何頭も花びらに混じり、空を飛び交っている。
ここまで来ると、故意に流れて来たとさえ思える。
風に流されながらも飛んでいる姿はまるで、いつまでも空にしがみついているように見えた。
それならば、花びらの方がいいと旅人は思う。
花びらは風がある限り、命続くまで旅をできるから。

思い出の旅

心に残る旅はと聞かれたら、旅人は幼い頃に見た夢の旅だと答えるだろう。
それ程までにその旅は、得る物が多かった。
淡い赤の空間。ピンクではなく、赤を薄めた空間だ。
そこに翼の生えた白馬がいた。
夢を翔けるペガサスだと、瞬時に悟った。
近くには、見たことのない少女。今ではもう、顔も思い出せない。
彼女と一緒にペガサスに跨がり、夢を渡る。
夢は、虹色の泡に包まれて、ぼんやりと色付いていた。
少女がひとつひとつ教えてくれる。
その青い夢は海の夢。
その赤い夢は夕日の夢。
その銀の夢は星たち。
数え切れない夢が、きらきら光り、ゆらゆら揺れ、時にははらはらと散って行く。
そんな幻想的な中を、二人、旅をした。
海原の歌を口ずさみ、夕日の色に染まりながら、銀の星を目指して。
ピンクではなく、淡い赤だと思ったのは、それが夕日の色だったから。
気の済むまで夢の中を旅して、最初の場所に戻って来る。
また会おうねと、指切りを交わした。
起きてから、考えてみた。
自分は綺麗な景色を見たい訳じゃない。
知らない世界を見たい訳でもない。
ペガサスに会いたい訳でも、少女とまた旅をしたい訳でもない。
ただただ純粋に、旅をしたいだけなのだ、と。

旅人としての人生は、その時に決まったのだと思っている。

吟遊詩人

旅人は吟遊詩人と出会った。
たまたま、目的地が同じだったのだ。
吟遊詩人は銀の竪琴を携えている。
気が向いたり、美しい光景を目にすると、誰に聞かせる訳でもなく、竪琴をつまびいた。
零れるような音が心地よい。
野道でふと見かけた花に癒されている、その些細な行動ですら吟遊詩人は歌った。
泉のようにこんこんと、言葉がとめどなく溢れて来るのが不思議だ。
もしも竪琴が弾けたならと、もしも美しい歌声を持っていたならと、思わなくもない。
若干羨ましそうに眺める旅人に、吟遊詩人は言った。
私はただ、歌いたいだけ。弾きたいだけ。
貴方と何が違いましょう、と。

星座と旅人

今夜は星が綺麗だ。
宝石よりも星が欲しいと思う。
星座やそれにまつわる話は、生憎旅の知識に消えてしまったが。
傍らに腰掛けた吟遊詩人が、ひとつの星座を指し示す。
そしてひとつ、話を紡いでくれた。
少し興味を持った者なら誰もが知るほどの、有名な話だ。
しかし旅人の食いつきは半端ではなかった。
宝物を見付けた少年のように、続きをせがむ。
話は急展開を向かえ、最終的には陰惨な終わり方になる。
そうして、その星座が空にできたのだ、と吟遊詩人が締め括った。
終わりも悲恋も、もっと言えば話の筋すらどうでもいい。
死んでも尚、旅をする気満々である。
死後の世界でも旅ができるのかと呟いた旅人に、吟遊詩人はそっと優しい微笑みを返した。

雨雲の歌

しとしとと鈍色の空から雨が降る。
こんな時でも、吟遊詩人は歌を歌う。
雨雲の歌だ。
だがそれは、どこかで聴いた歌とは違っていた。
嫌わないでと言葉を募らせながら、そうなることは諦めた様子が、物悲しい旋律と今の風景によく似合う。
だからと言う訳ではないのですが、と歌い終わった吟遊詩人は言う。
雨雲も雨も、晴天と同じくらい愛していると。
旅人もまた、同感だ。
晴々とした青空の元、絵画になりそうな風景の中を歩いていくのも好きだし。
雨に降られながらの旅も、土砂降りで足止めを喰らう旅も、やはり好きだ。
こうして二人、笑い合えるのも後暫く。
友との別れは近付いている。

雨の別れ

雨が降り注ぐ。
吟遊詩人と別れた街角は、青色に染まっていた。
気怠げで、静かで。
身も心も青に染まってしまいそう。
吟遊詩人は言った。さようなら、と。
もう二度と会うことなどないと、分かっているようだった。
旅人自身、望んでいた言葉でもある。
けれど。
だからこそ。
また会おうと言ってやれなかった。
吟遊詩人が望んでいた言葉を、かけてあげられなかった。
雨が降り注ぐ。
全てを青に染める雨の中、置き去りにされたのは果たしてどちらなのだろう。

青の世

過ぎたことは嘆いていても始まらない。
雨降りの街を出て、荒野を歩く。
相変わらず、雨は荒野までも青く染める勢いだ。
一度だけ、街を振り返る。
今まで立ち寄った村や街は数あれど、決して振り返りはしなかった。
特別な街は、雨に遮られてぼやけている。
独りと言うのは、これ程までに寂しいものだったのだろうか。
竪琴の音色が聞こえやしないかと耳を澄ましても、聞こえてくるのは地を打つ雨の音。
これから先、雨が降る度に思い出す。
寂しげな音色と、青の世界を。

一面の草原

風に吹かれ辿り着いたのは、どこまでも続く広大な草原。
緑の絨毯と比喩するのは簡単だが、そんな使い古された言葉では表しきれない。
地平線の向こうまで続いていそうだ。寧ろ世界中の地表を覆っていても、おかしくない。
一方で、己の存在の小ささを、感じずにはいられない。
膝まである草は青々と茂り、様々な緑色を宿す。
空の青との対比が美しい。
草が一斉になびくと、風の姿を捉えることができた。
足を止め目を閉じ、胸いっぱいに息を吸う。
肺の中まで草の香りがするようだ。
懐かしく思うのは、故郷の近くにも草原があったからか。
風に聞こえる葉擦れに旅愁を掻き立てられながらも、旅人は暫くその場に佇んでいた。

草原の騎士

草原の遥か彼方から、剣を掲げながら馬で駆けて来る騎士が見えた。

その顔は喜びに満ちていると、旅人は思った。

しかし、近くまで来ると、その考えは大きく覆される。

騎士は、泣いていた。

勇ましい姿ばかり見ていたので、意外ではあったのだけれど、心の中ですとんと何かが落ちる。

騎士は国を愛すると聞く。

あの騎士は、勝ったことよりも愛しい国へ帰れることが、何よりも嬉しいのだろう。

笑って帰りたいから、今泣いているのだろう。

今までは全く違う存在だと思っていたが、今はよく似ていると思う。

愛する対象が違うだけで、あの騎士と旅人の愛は同じくらい強いものだから。

少年の夢

少年は、泣いていた。
風に揺れる草も、空を飛ぶ鳥も、きらきら輝いて喜びに満ちているのに。
ただ一人、大切な物を失ったような、そんな顔をしていた。
聞けば、他人にひどく夢を踏みにじられたと言う。
旅人も周囲の人間にひどく反対されたものだ。
しかし、全てを旅に費やして、夢を現実にした。
今の夢も、きっと叶うと本気で思っている。
少年の涙を拭いて、優しく諭す。
夢は逃げない。こちらが夢から逃げない限りは、夢はずっと待ってくれている。
だから、本当に叶えたいなら、情熱を傾けて夢じゃなくしてみればいい。

少女の夢

余程ひどいなじられ方をされたのだろう。
少年の涙は止まらなかった。
捨て置くのも気が引けるから、旅人は傍にいた。
時々声をかけてやることしかできない。
草原の向こうから、少女が誰かの名を呼びながら駆けてくる。
少年が小さく反応したから、それが少年の名前なのだろう。
少女は少年を見付けると、開口一番にこう言った。
キミが見てるのは、わたしの夢なの。
少年が涙に濡れた顔を拭く。
そこには、幼くして守るべき者を得た、騎士に似た強い決意があった。
去って行く少年少女に、旅人はひとつだけ約束させる。
流れ星へと託してはいけない。
星は決して夢を叶えてはくれないし、情熱を傾けて見ている夢を、そんなに簡単に他人に委ねるべきではない、と。

夜の草原

日の暮れた草原は、暗い海になる。
葉擦れの音が、まるで潮騒のよう。
空との境も曖昧で、不思議な気分だ。
優しい風に誘われて、旅人はまた歩き出す。
風の吹くままに、気の向くままに。
時折空を眺めては、必死で煌めく星々に癒される。
星座のことは分からないけど、どうやら今夜は当たりの日だったらしく。
目立たなかった小さな星が、微かな白い線を描きながら、漆黒の中へ溶けていく。
それを皮切りに、星達が次々に闇を切り裂く。
一点を目指して。
旅人は星を追うことにした。
夜の旅には危険が多いけれど、その分昼間とは別の魅力に溢れているから。

賑やかな旅路

夜の旅路は幻想的で賑やかだ。
星達は夜空に煌めいて絶えず瞬いているし、月の光はふわりと道を優しく照らす。
そんな光景を見せ付けられてしまったら、危険を冒してでも夜の旅をしたくなるもの。
星の色は白ばかりではない。
黄色も橙色も赤色もあるし、青色もある。
緑色と紫色がないのが、若干不服だ。
もしあったら、虹みたいで綺麗だろうにと旅人は思う。
人が作った道に果てはある。
けれど、旅の道に果てはない。
果てがないからこそ、いいのだ。
ずっとずっと旅をしていたい。
昼も。
夜も。
ご機嫌な旅人は適当な歌を歌いながら、誰もいない道を歩いて行く。

ランプとリボン

旅人は、荷袋から銀のランプを取り出して、火を点ける。
その取っ手には金色のリボンが結ばれていた。
いつぞやの露店で買った物だ。
他にも様々な色のリボンがあったが、銀でも黄色でもなく、金色なのが気に入ってしまった。
旅人が歩く度、リボンは蜘蛛の糸のようになびく。柔らかな金色の波を描く。
太陽の光を反射して輝く月のように、ランプの光と月の光に輝くリボン。
煌めくランプは銀の星。
輝くリボンは金の月。
すれ違う人がいれば、思わず振り返ってしまうだろうが、旅人は一人の時にしかランプを使わない。
一人だけの、楽しみだから。

昼も夜も

どうしてか、夜と言うと月、月と言うと儚いと言うイメージがある。
夜から星に、星から儚いパターンも非常に多い。
吟遊詩人たちは、こぞって月や星の儚さを歌い上げる。
そのどれもがありきたりで、だからこそどこか作り物めいていて、旅人はあまり熱心に聴いたことがない。
美しいだけが、儚いだけが、月や星ではない。
ましてや、夜は恐ろしい物でも何でもない。
風がざわめくのなら、そう思った人の心がざわめいているだけで。
草が戦いているのなら、彼らは何に戦いているのだろう。
月は旅人が迷わないように、道を照らしてくれている。
星は旅人が寂しくならないように、夜空に瞬いている。
風は相変わらず優しいし、草は今日も元気になびいている。
旅人は今日も明日も、旅をする。

黒猫

旅人の進路を黒猫が阻む。
僅かな光にその瞳は緑色に輝き、じっとこちらを見ている。
しゃがんで舌打ちすると、いかにも恐る恐ると言う態度で歩み寄って来た。
指先や足先などに鼻を近付け、ニオイを嗅いでいるらしい。
動かずにいると、安全と判断されたのか、頭を擦り付けられた。
撫でればうっとりと目を細める。
地面に寝転がり、うねうね催促。
無防備な腹を優しく撫でてやると、何とも言い難い柔らかさ。野良の割に食生活は上々らしい。
前脚を取り、爪を出して見る。
うむ、イイカンジに研ぎ澄まされている。
これでぶっすり刺されたら、二、三日は痛いだろう。
すっかり旅人に慣れたのか、なされるがままに肉球を揉まれている。
ひとしきり構ってやった旅人が立ち去ろうとすると、黒猫はきょとんとした顔のまま頭を持ち上げ、しばらく前脚を交互ににぎにぎしていた。

降り立って

旅人の前にふうわりと、輝く船が降り立つ。
青白い光を放ち、光の粉を撒き散らし、それはそれは幻想的で、それでいて力強さも感じる、夢のような船だった。
首が痛くなるほど見上げる甲板から、光の帯が音もなく伸びる。
旅人の足元に到達すると、今度は黒いローブを纏った人物が降りて来る。何故か男だと思った。
船も帯も光り輝いているのに、その男の周囲だけが暗い。光を呑み込んでいるかのよう。
不思議なこともあるもんだと眺めていると、ローブの男が恭しく礼をした。
釣られて旅人も礼をする。
男が笑った、気がした。
旅人の胸が期待に高鳴る。
もしこんな船で空の旅をしたら、一生の宝物になるだろう。
絶対にできないと思っていた空の旅が、叶うかも知れない。
少年のように瞳を輝かせる旅人に、男がまた笑った。

羅針盤

ついて来い、と言わんばかりに目の前の男が踵を返す。
旅人は船へ続く光の帯に、足を踏み入れた。
意外にも、光の帯は堅い石でできたかのような感触だった。
船上に降り立つと、改めて船の大きさを実感する。
淡く輝く帆は、信じられないくらい白い。
舵の傍にある羅針盤に、旅人は釘付けになる。
数々の星が映り込み、とても方角を知ることはできそうにない。
それなのに何故か、一点を指しているのが分かる。
ローブの男が呟いた。
それを頼りにしてはいけない。
頼ってしまったら、この船の翼は砕かれるか狂うか。
いずれにせよ、二度と地上に戻れぬと知れ。
耳元でそっと囁くそよ風のような声なのに、低い声は耳に残った。

古いコンパス

光の中にぽっかりと浮かぶ黒い男から、方位磁針を渡される。
使い込まれ、アンティーク特有の鈍い光を宿すそれは、道具本来の姿に思えた。
指針がある一点を指している。
旅人が自分の方位磁石を取り出して、掌に並べた。
どちらも使い込まれているが、しっかりと北を指す旅人の物と、北とは別方向を指す渡された物。
よく見ると、渡された方には方向を知る手掛かりがない。
本来なら北や南の略語が書かれているのだが、それが全くないのだ。
しかし、この方向音痴の方位磁石が何の為にあるのかは、すぐに理解できた。
針の先が示すのは、旅人が帰るべき場所。
きっとこれなら、迷わない。

夜空の旅

今宵だけ、夜空を渡る船は君の物。
そう聞こえた。
だから、旅人は舵を握る。
旅人の意思に応えるように、船から振り撒かれていた光の粉が、純白の翼を形作る。
来た時と同じく、船はふうわりと浮き上がった。
闇で満たされた深い空を、船は行く。
操舵室は一段高い所に作られていたため、舵を取りながら地上を見下ろせた。
海も陸も真っ暗で、境目がない。
辛うじて弱々しい光が見える所が、恐らく人里だろう。
賑やかできらびやかな街も、空から見れば何とも頼りない光だ。
空から見た世界は一つで、揺らめく炎の明かりは今にも消えそうで、人間は何てちっぽけな存在なのだろう。
そんな事を思いながら、旅人は船旅を楽しむ。
その胸にあるのは、自然への畏怖ではなく畏敬の念だった。

旅を終えて

寝起きの耳に、小鳥のさえずりが優しく朝を告げる。
森はまだ朝もやに包まれて、どこか夢見心地。
旅人は、昨夜の出来事をじっくりと思い出す。
空から降り立った光る船に乗って、夜空を旅した。
果たしてあれは、夢だったのだろうか。
夢でないのなら、何故帰って来た時のことを覚えていないのだろう。
首を傾げて考え込む間にも、時間は過ぎて行く。
朝もやが晴れると共に、夢だった部分は薄れて消える。
それならば。
あの夜空の旅は現実なのか。
月の光を宿した帆も、真珠のような翼も、惑わしの羅針盤も、帰還のための方位磁石も。

少女の舞

街角で、少女が踊っている。
民族衣装に身を包み、そのロングスカートの裾を柔らかにつまんで上げ、独特のステップを踏んで。
どこからか飛んで来た、淡い黄色の花びらが、少女の可憐さに華を添える。
頑丈な石造りの建物に囲まれ、決して目立つことはないけれど。
屋根の上から、野良猫が物珍しそうに見下ろす。
小さな観客は徐々にその数を増やし、路上パフォーマンスを見て立ち止まる人のよう。
愛らしい観客が増えていることに、少女は気付かない。
楽しそうに飛んだり跳ねたり回ったり。
祭が近いのか、それとも単に躍るのが好きなのか。
微笑ましい光景に、穏やかな気持ちが芽生えた。

城下町

懐かしい風が吹く、城下町を歩く。
町は家も道も門も、どこもかしこもレンガで覆われていて、まるでおとぎ話のよう。
誰かの歌声が高々と、町と心を包んでゆく。
元気いっぱいに子供たちが走り回り、屋根によじ登ったり、実に平和だ。
後を追う大人たちの悩みなぞ、まるで分かっていない。
子供は、元気過ぎるくらいがちょうどいい。
野良猫たちもそこかしこにいて、子供たちの絶好の遊び相手になっている。
野良猫も子供たちも、きっと逞しく生きて行くだろう。
不意に、鐘が鳴る。
町を包むその音は、全てを見守ってくれているような、優しい音色。
絵画では味わえないこの町の魅力を味わいながら、旅人は城下町を歩く。

海辺のバザー

照り付ける太陽が、肌を、砂を、海を焼く。
活気に溢れた海辺では、バザーが行われている。
小麦色に焼けた、体格の良い男性やスレンダーな水着美女が、商品をアピールしながら、元気と笑顔を振り撒く。
声に誘われて、旅人も露店を覗いてみた。
アクセサリーも果物も、海や夏を象徴した物が中心だ。
その中の一つに目が奪われ、旅人は手に取っていいかと店員に問う。
店員は快く許してくれた。
海色した小さな貝のオルゴール。
壊れないよう、そっとゼンマイを巻く。
聞こえてくるのは、遠い遠い海の向こうの歌。
食料以外の荷物を増やすことは、旅人にとって死活問題だ。
けれど、重さのない物なら、いくらでも持ち歩ける。
オルゴールを丁寧に戻した旅人は、異国の歌を口ずさみながら去って行った。

双子の道化

空を覆っていた雲が、まるで闇に切り裂かれるかのように、晴れて来る。
それでもまだ、星達は雲に包まれたまま。
月は見えない。
今日はどうやら新月のようだ。
月のない空も、それはそれで雅やか。
眠りに就いた街を歩く。
ふと、僅かに影が揺れた。
周囲をよく見てみると、幼い双子の道化師がパフォーマンスの練習をしている。
子供特有の身軽さと、洗練された動きが合わさり、独特の雰囲気が醸し出される。
彼等は幼いながらもプロだと、納得した。
夜は寝る間を惜しんで練習して、昼は笑顔いっぱいに咲かせて。
夜の街は知らない顔を、たくさん持っている。

翼が死んだ日

雨が降る街角に、白い羽根が落ちていた。
水溜まりに浮き、雨に打たれている。
一枚だけなら旅人も看過したが、鳥の物だとしても、不自然な数だ。
怪我をして動けなくなった鳥は、そのまま死んでいく運命にある。
考えるより先に、足はより多くの羽根が落ちている方へ向かう。
そこにいたのは、ボロ布のように破れた翼の人。
天使と言いたい所だが、その人には失礼ながら神々しさはない。
世界のどこかに翼を持つ、有翼人がいると聞いていたから、多分それだろう。
灰色の空を見上げ、何事か呟いている。
旅人がもし旅をすることを取り上げられたら、この有翼人のように狂ってしまうだろう。
そう思ったが、考えを改めた。
言葉は分からないのに、有翼人は死んだ翼に感謝していた。
不格好になって、血もにじんでいて、多分痛みもあるだろうに。
言葉も通じないこの土地で生きるのは、並大抵の苦労ではないだろうに。
旅が出来なくなったら、ただただ途方に暮れそうな旅人とは全く違う。
旅は道連れ、世は情け。
立ち止まるどころか見向きもしない人々の中、敬意を篭めた瞳で手を差し延べた旅人を、有翼人はどんな顔で迎えたのだろうか。

面影を探して

雨が降ると、人々は屋内へ避難する。
例えば旅人や冒険家のように、雨に打たれることが命に直結する問題ならば、納得できる。
それなのに、みなこぞって雨を嫌う。
雨を愛しく思うのは、変わり者ばかり。
旅人は、雨でけぶる街を歩く。
逃げ遅れたのか、女性が一人、慌てた様子で角を曲がって行った。
程なく戻って来た彼女は、心なしか元気がない。
人探しをしていて見付からないのだろう、と旅人は思った。
放浪する人々は、他者の厚意で命を繋ぐ。
故に、他者の表情を読み取ることに優れているのだ。
旅人も例に漏れない。
気になって振り返った女性の足取りは、強く、強く。
きっと涙を雨に溶かしてでも、彼女は愛しき面影を追うだろう。
そこまで想われている男に、些か羨望の思いを抱きながら、旅人はまた、雨の街を歩く。

薔薇と少女と

蒼く染まる街の中、民家に咲いた薔薇だけが、咲き誇っている。
雨はひどく、軒先で雨宿りしている旅人に吹き付けるほどだ。
そんな中なのに、薔薇は力強く可憐。
見とれていると、視線を感じた。
民家の中から、少女が薔薇を眺めている。
誰に恋をしているのか、甘く蕩けるような表情で、笑顔を零しながら。
少女と目が合う。
彼女は旅人にも、その蜜と見紛う微笑みを向けて来た。
未熟さ故に魔性はない。
だがそれがいい、と旅人は思う。
佇んでいるだけで蒼の世界を染める花の、凛とした佇まいは誇り高い騎士のようで。
雨の青に負けず、風に吹かれて踊る紅は、舞い踊る貴婦人のようで。
きっと嫌なことも切ない想いも、拭われるだろう。

双子の兄妹

雨宿りをしていた民家の主が、中へ招き入れてくれた。
主は、旅人に暖炉を与え、温かいココアもいれてくれると言う。
旅を始めた当初は慣れなかったが、今はもうすっかり厚意に甘え、旅の話を対価に出すことに慣れた。
彼らは、旅のために生きて来た旅人と違い、旅をする知識を持たない。
だからこそこの、一見等価交換にならない交渉が、成り立つのだ。
主には双子の兄妹がいた。
小さなマグカップで温かいココアを飲む兄妹は、旅人の話に宝石のような瞳を向ける。
その対象は微妙に違っていた。
兄の方は冒険の話に。
妹の方は旅人自身に。
男で良かったと思いつつ、双子が寝付くまで、旅人はたくさんの話を聞かせた。

守護者

随分昔に滅ぼされたらしい集落に着いた。
崩れた石材は、苔むしている。
集落の入口と思しき所には、見上げるほどの土くれ。
普通に考えれば不自然だが、ここに限っては自然である。
曰く、街を護るために魔法使いがゴーレムとなったらしい。
しかしそんな街も、結局は内戦で滅びてしまったと言うのだから、何とも愚かだ。
ゴーレムは街を護るため、誰ひとり出そうとも入れようともしなかった。
他の街や国からの援軍すら、立ち入らせなかった。
街が滅びても、大分長くそうしていたのだとか。
ゴーレムが護った街は廃墟になり、ゴーレムは土に還り、後には瓦礫しか残っていない。
こんな皮肉な結末を誰かが知っていたら、未来は変わっていたのだろうか。
遠き過去に思いを馳せながら、旅人はそっと街に入って行った。

生き残り

崩れた石柱の隙間に、オルゴールが鎮座している。
最近置かれたものだろうか。
それとも、石柱が傘代わりになっていたのか。
オルゴールは錆ひとつなく、佇んでいる。
丁寧に拾い上げ、ゼンマイを巻く。
流れて来たのは、暗く物悲しく、美しい曲。
抜けた音もなく、歪みもない澄み切った音は、この街で唯一の、生き残り。
もう生活臭さえ抜け落ちた廃墟に満ちる。
どんなに栄華を極めても、やがては朽ちて消えてしまう。
それは儚い、夢のように。

コスモス

秋の風にコスモスが揺れる。
春色の手を優しく振りながら、夕日に別れを告げている。
愛らしく元気なその色は、今が秋であることを忘れさせる。
枯れゆくだけの秋に、華やかな色を添える。
それでいて、葉は銀細工のように華奢だ。
コスモスは強い。
他の花が生えないような場所にも、可憐に咲き誇る。
河川敷や広場一面に敷き詰められているのを見ると、その中に恋する乙女を連れて来たくなる。
春が恋しいこの季節。
秋を代表する花は一足先に春を宿し、過ぎゆく人々の目を楽しませる。

黄金色の季節

夕暮れは、季節ごとに違った表情を見せる。
秋の夕暮れは、優しい。
夏が置き忘れた、モコモコした真っ白の雲に、黄金色の光が当たる。
たくさんの植物がその色を真似て、実りの秋を迎える。
頭を垂れた稲、起立しながらも重そうな小麦。嬉しい変化だ。
鳥の綿毛みたいになったススキ。子供たちが手折って行くのを見ると、心がほっこりする。
銀杏の周囲には、黄色い葉が敷き詰められる。小動物が埋もれた果実を探して、ばさばさと撒き散らす。
山に生えるあけびは、旅人の腹を満たす。つるは生活用品に加工され、茎は生薬となるので、山間部に住む人々にとっても貴重な資源だ。
黄金色の季節ほど、旅人に優しい季節はない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3771w/

旅人が見たもの

2011年10月1日03時23分発行